実践事例 3

予習を重視した家庭学習を基に「生わかり」を「本わかり」に変える

岡山県 岡山市立岡北（こうほく）中学校

岡山市立岡北中学校は、予習を重視した家庭学習を推進している。何となく授業を受けるのではなく、どこが分からないのかの見通しを持って授業に臨むことで、授業の理解度を高め、更に次時に向けた予習、授業へとつなげている。

学校と生徒の様子、課題

限られた授業時間ですべての生徒が「わかる」授業を

岡北中学校は岡山市中心部にほど近く、岡山大などが立地する文教地区にある。2008年度から3年間、校区の二つの小学校、二つの幼稚園と共に「岡山県学力・人間力育成推進モデル地域指定」を受け、東京大大学院の市川伸一教授が提唱する「教えて考えさせる授業」を実践してきた。

生徒の学力分布は幅広く、学年によって家庭学習習慣の定着に開きがある。地域と共に行う数多くの行事を大切に守りながら、一斉授業の限られた時間ですべての学力層を引き上げることが課題だ。そのために、授業を何となく受け、何が分かり、何が分かっていないのかがはっきりせずに、授業が終わってしまうという状態を避け、すべての生徒が本当に「わかる」授業を追求したいと考えていた。

取り組みのポイント

◎基本的な考え方

分かること、分からないことを予習で明確にさせる

「教えて考えさせる授業」では、家庭学習において予習を大切にする。予習によって、次時の授業について分かっていることと分からないことが明確になった「生わかり」の状態にし、見通しを持って授業に臨ませるためだ。

予習は、主に教科書を読み、分からない部分に線を引いたり、付箋紙を貼ったりという内容が多い。この予習を受けて、授業ではまず、生徒が予習でどこまで理解してきたかを教師が確認し、分かっていない部分を重点的に教える。「生わかり」だった生徒が学習内容を理解した「本わかり」の状態に変わるように授業を進める。平松茂校長は、家庭学習と授業の関係を次のように語る。

「最終的な目標は、生徒に自ら進んで学ぶ姿勢を身に付けることです。その土台となる

School Data

◎1947（昭和22）年開校。「豊かな心・確かな学力の育成」を教育目標に、幼・小・中連携に力を入れる。体育祭や文化祭はもとより、宿泊体験や地域ボランティア活動等、行事が盛ん。

校長◎平松茂先生

生徒数◎474人　学級数◎15学級（うち特別支援学級1）

所在地◎〒700-0081　岡山県岡山市北区津島東1-1-1

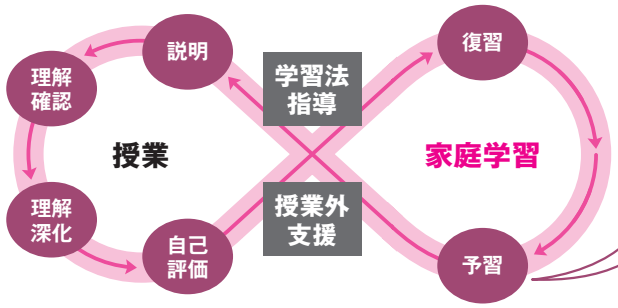
TEL◎086-252-3256

URL◎http://www.city-okayama.ed.jp/~kohokuc/

公開研究会◎2010年11月9日に実施済み

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第4回

意欲を引き出す「家庭学習」指導



目的・本時の学習内容に見通しを持つ
・「分かる、分からない」を自覚し、学習への構えを持つ

時間・家庭学習で実施
・前時の終わり、または授業開始時に行う場合もある

内容・学習範囲を読み、学習内容を知る
・大切な個所に線を引いたり、分からない個所に「?」をつけたりする
・教科書を写す（図や表、大切な言葉など）
・問題を解く
・自分の言葉で説明したりまとめたりする

予習の仕方を示し、目的を意識させる

◎予習でのポイントは、「次の授業の見通しを持って授業に臨む」という目的を意識させること。例えば、教科書をただ読むのではなく、読みながら疑問や問題点を明らかにし、自分の理解度をチェックしておくことを目指す。

学力を授業で身に付けるために、構えとなる『予習』と定着のための『復習』が家庭学習で必要なのです」

予習は実技教科を含む全教科での実施を目指しているが、全教科、毎時間で課すわけではない。単元によっては予備知識がない状態で授業を受ける方が、驚きや発見が生まれて効果的な場合があると考えるからだ。「例えば理科では、マグネシウムが激しい熱と光を出して燃えるのは、予習せずに実験で初めて出合ってほしい場面です」と平松校長は話す。

こうした考えは、復習を軽視するものではない。復習は、授業で理解できなかった部分の再確認や、更なる定着を図るための重要な学習機会という位置付けだ。

◎校長の役割
教師一人ひとりの持ち味を引き出す環境づくり

平松校長は10年度に着任以来、時間を見つけて授業を見て回るようにし、時には授業内容を細かく記録したり、デジタルカメラで撮影したりすることがある。それらを使って、授業者には、改善点を指摘するというよりも、授業の良かった点を具体的に挙げ、褒めるようにしている。

「先生方の力を更に引き出すためには、管理職や校内の先生同士であれこれ指摘してもうまくいかないことの方が多いです。むしろ外部の第三者に指摘してもらった方が受け入れやすいと思います。私の役割は、そうした場を設定し、授業スタイルや発想の異なる先生方がそれぞれ力を発揮できる環境を整えることです」（平松校長）

岡山市立岡北中学校校長
平松 茂 Hiramatsu Shigeru
「知行合一。一人ひとりの生徒や教師を大切にした上で、自分の想いを実践に移したい」

成果、今後の展望
予習する生徒が増え、授業が活性化 小中連携で更なる効果を目指す

全教科で取り組んできたことによって、生徒に予習の習慣が付き、学習規律も向上しつつある。見通しを持って授業に臨めるようになり、授業中も積極的に質問したり発表したりする生徒が増えてきたという。こうした生徒の変化を目の当たりにして、教師は家庭学習の指導スタイルの工夫にますます積極的に取り組むという好循環が、同校の中で回り始めている。

とりわけ、共に研究を進めてきた校区の小学校で予習の習慣を身に付けた1年生は、授業規律を守り、学習意欲も高い。今後も、小学校との連携を強めることで、更なる学力向上を目指す考えだ。

実践例 2年生◎数学

解けそうで解けない、授業で答えを知りたくなる課題を出す

岡山市立岡北中学校
田口直樹 Taguchi Naoki
1学年担任、数学科担当。「一番が家庭生活、二番が学校生活、三番が部活動。順番を間違えず大切にしてほしい」

◎予習の考え方 平面図形は予習型、方程式は復習型

田口直樹先生が課す予習は、教科書を一読して重要事項を確認し、線を引いてくる程度のものが多い。

「数学は、既存知識を使って類推する力が大切。そのために必要な知識をしっかり習得できる構えが予習です。たとえ内容を理解できなくても、一通り教科書に目を通してくるだけで、授業を聞いて理解する力が違うと感じます」（田口先生）

田口先生は、分野によって宿題の種類を予習と復習とで使い分けている。例えば、平面図形では予習を、文章題や方程式では復習をそれぞれ重視。文章題の意味を読み取るのが難しい生徒でも、図形なら視覚的に取り掛かることができ、一人で予習しやすいからだ。

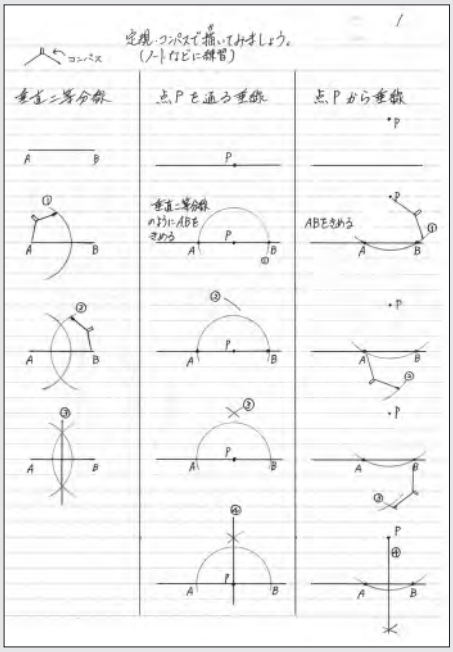
「練習問題を宿題とする場合は、どれだけ面白い問題を課題に出せるかを常に考えています。面白い問題とは、解けそうで解けない問題、次の時間に答えを知った時、『なるほど！』と思うような問題です。この工夫次第で、生徒の授業に向かう意欲が決まると実感しています。そうした問題を入試問題から探して宿題に出すこともあります」（田口先生）

◎復習教材の工夫 丁寧なプリントで下位層の家庭学習をサポート

復習時に教科書やノートを見ても、自分一人では問題の解き方や図形の描き方を再現できない生徒もいる。そこで、田口先生は、数学が不得意な生徒でも一人で復習しやすいように、自作プリントを配布している。例えば、**図1**は「垂直二等分線」「点Pを通る垂線」の描き方の手順を、コマ割り漫画のように解説するプリントだ。

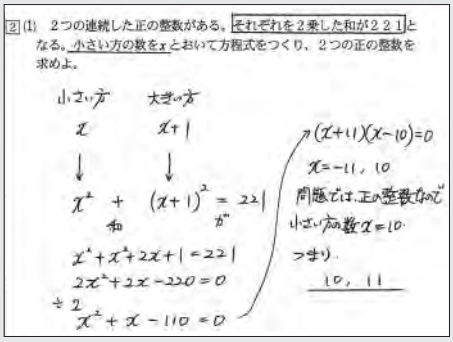
また、定期テストや小テストの後には詳細な解説（**図2**）を配布するなど、単に再テストを課すのではなく、授業中に生徒同士で教え合う時間を設定。学力下位層が数学を嫌いにならずに家庭学習習慣を身に付けられることを強く意識している。

図1　復習用のプリント



「垂直二等分線」などの描き方を順を追って解説するプリントを配布。生徒が家で復習しやすいようにするのがねらいだ。最後には練習問題を付けている　＊学校資料をそのまま掲載

図2　テストの詳細な解説プリント



定期テストと同じプリントに、先生が解答解説を書き込み、テスト後に配布する　＊学校資料をそのまま掲載

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第4回

意欲を引き出す「家庭学習」指導

実践例 1・2年生◎英語

必ず予習をしてほしい時には授業中に次時の予習を行い、定着を図る

◎予習のバリエーション 夏休みの宿題は2学期の予習

塩見温子先生は、以前から1年生に予習として単語の意味調べを課していた。「教えて考えさせる授業」の実践に伴い、1年生の2学期からは文法事項の予習も追加。ちょうど学力差が広がり始める時期であるため、英語が苦手な生徒でも出来る簡単な内容を心掛けた。例えば、次の授業で学ぶ基本文型を解説した部分を読んで書き写す、といったことなどだ（図3）。

「全く何も知らない状態より、教科書に何が書いてあるかだけでも把握した状態で授業を受ける方が、学習の見通しがつくため生徒も安心するようです」（塩見先生）

一方、ワークシートやプリントといった復習の宿題も従来通り課していたため、生徒の負担は大きかった。生徒が取り組みやすい方法を模索する中で、10年度、2年生に取り入れたのが、夏休みのまとめ予習だ。2学期に学ぶ範囲の単語の意味調べをまとめて夏休みの宿題にすることによって、2学期に入ってからの予習は文法事項に特化できるようになった。

ただし、こうした取り組みを重ねても、予習をしてこない生徒がクラスに2、3割いる。そこで、必ず予習してほしいという時には、授業中に次時の予習をさせることがある。例えば、次の授業からつまずきやすい単元に入る場合、授業を5分ほど早く終えて、「予習をしてみましょう」と指示し、予習の内容や学習方法を指導するというものだ。

「予習を重視するようになってから、授業の導入がスムーズになり、後半の活用や発展へと広げやすくなり、授業全体が活性化しています。ただ、依然として、予習が習慣化していない生徒への手立ては難しく、小学校段階からの連続した指導の重要性を感じています」（塩見先生）

岡山市立岡北中学校
塩見温子 Shiomi Atsuko
2学年担任、英語科担当。「何もせずに先のことを心配するのではなく、失敗を恐れず挑戦してほしい」

図3　2年生英語の指導案（本時案と予習の概要）

目標	不定詞の副詞的用法を理解する
予習	ワークブックの「文法のポイント」を読み、ノートに写してくる

	学習活動	教師の支援
教える	〈説明〉 1 文法説明を聞き、ノートに書く 2 名詞的用法、形容詞的用法との違いを理解する	・本時のねらいを示す ・いくつかの例文を挙げ、既習の不定詞とは違うことに気付かせる **教える** 不定詞（to＋動詞の原形）は動作の目的や理由などを表すことがある。この不定詞を副詞的用法という
考えさせる	〈理解確認〉 3 ワークブックの問題を解く 4 ペアワークをする。Why～？の文に対する理由を選び、英語で答える。友だちが答えた英文を書く 〈理解深化〉 5 英語歌のを聞き、不定詞の形になっている箇所を探して線を引き、その意味を考える	・机間指導により、分からない生徒にヒントを与える ・数名指名して、答えを発表させたり、黒板に書かせたりして、説明を加える ・互いに読み方や答え方を教え合いながら、ペアで問答をさせる **考えさせる** どのような不定詞が歌のどこに出てくるだろうか ・訳詞では to＋動詞の原形が「～するために」となっていないので迷う生徒がいると予想される。互いに協力させたり、ヒントを与えたりするなどして、to＋動詞の原形～以降が「なぜ？」「何の目的で？」の問いに対する理由や原因、目的を表していることから区別すればよいことを確認する
振り返る	〈自己評価〉 6 自己評価シートで今日の授業を振り返る 7 次回の課題を知る	・評価シートの穴埋めをし、本時の学習のまとめをする ・次時は本文の内容理解を扱うことを伝える。宿題はなし

＊学校資料を基に編集部で作成

実践例 1年生◎社会

予習ノートをつくり授業は「理解を深める場」と位置付ける

◎予習の方法 板書のようなノートをつくる

10年度に赴任した藤田健児先生は、「最初は予習させることに抵抗がありました。特に歴史は、予習すると面白さが薄れると思っていたからです。今ではその考えが変わりました」と話す。予習にはノートづくりを課す。

「社会ではノートをつくる力が最も大切だと考え、『板書とノートが近づいてくると良いんだよ』と指導しました」（藤田先生）

1学期は重要語句を調べる程度にとどめ、ノートのつくり方を丁寧に教え、定期的にチェック。当初は教科書を丸写しする生徒が多かったが、次第に板書に近いノートが増えた。2学期には、予習を前提にした授業に切り替えた。板書中心から、藤田先生自作の穴埋め式ワークシートを使ったスタイルとし、生徒が自分の予習ノートを見ながら空欄を埋められるようになることを目標にした。

「授業では、ワークシートを使って予習内容を確認した上で、理解を深めることに時間を使えるようになりました。『なぜ、そういうことが起こったのか?』といった生徒同士の話し合いを通して、予習しないことで得られる驚きと同様以上の効果を感じています」（藤田先生）

出来栄えに差はあるものの、予習をしてこない生徒は各クラス1、2人程度。要点を押さえたノートをつくる生徒は、7割近いという。ノートは上手にまとめられるが、テストの成績は思わしくない生徒もいる。藤田先生はそうした生徒に対して、「諦めずに3年間続ければ、必ず実力が付く」と励ましの言葉を掛けている。

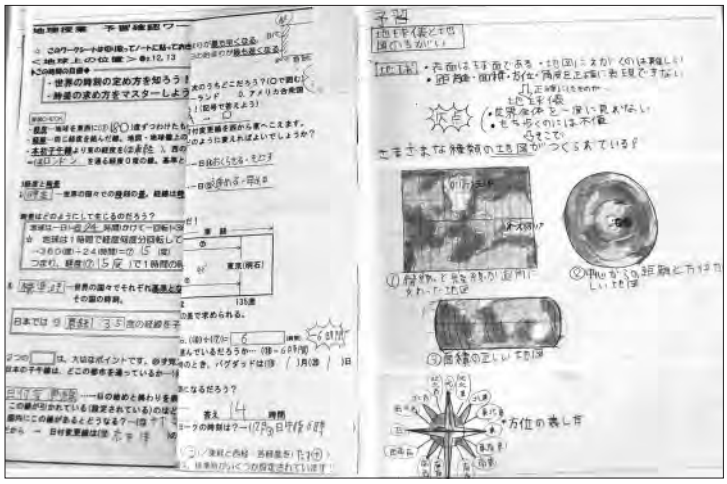
◎定期テストの復習 学びが広がる「テスト直しノート」

定期テスト後には、間違えた問題の答えと問題文のポイントを記入する「テスト直しノート」をつくる。問題に関連する周辺事項を調べたり、4択式ならば、不正解の三つの選択肢が何を意味するかも調べる生徒もいるという。こうした作業の積み重ねにより、「これは引っ掛け問題だ」と気づくなど、解答自体を楽しめる生徒が増えているという。

「テスト直しノート」は評価の対象だ。2学期の終わりには4段階評価でほぼ全員が合格のBランク以上になった。Sランクの「テスト直しノート」は手本として配布している。

「予習ノートや『テスト直しノート』をつくる力は、高校入試やそれ以降も必要な自学自習の力につながる大切な力ではないでしょうか」（藤田先生）

岡山市立岡北中学校
藤田健児 Fujita kenji
1学年担任、社会科担当。「自分を甘やかすことなく、自分を大切に出来る人間になってほしい」



1年生の予習ノート（画面右半分）。色ペン等を使い、楽しみながら工夫している様子がうかがえる。テスト勉強に備え、藤田先生手作りの授業用ワークシート（画面左半分）をセットで綴じる生徒が多い

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第4回

意欲を引き出す「家庭学習」指導

自校化の視点

「書く」ことを重視した予習で授業の見通しを持たせる

授業インストラクター／「認知ゼミ」主宰／岡山県「学力・人間力育成事業」指導助言者
鏑木良夫
Kaburagi Yoshio

◎取り入れたい考え方
予習により、下位層の生徒も安心して授業に臨める

岡北中学校では、予習を取り入れた家庭学習と授業を関連付け、すべての生徒が「分かった」と言えるような授業をつくろうとしています。予習の目的は、明日習うことの概要を知り、分からない点や疑問を明らかにして授業に臨むことです。ですから、予習は、①授業内容に直結し、②生徒の実態に応じて難易度や内容を工夫し、③「見る・読む・調べる」だけでなく「書く」課題とすることが大切です。

③は、ワークシートの穴埋めではなく、文章を書くことが重要です。次時の範囲の丸写しから始めても構いません。授業の内容を答えまでノートに書くことで、生徒は見通しを持って安心して授業に臨めます。ワークシートと異なり、文章の行間を読み、文脈を理解する力を付ける訓練にもなります。

学びの機会（時間）を保障する意味で復習は大切ですが、授業が分からない生徒は復習しようにも出来ません。復習という学習機会を効果的に使うためにも、授業を理解するための予習を大切にしたいものです。また、予習によって、生徒が授業で同じスタートラインに立てることも大きなメリットです。

学びの原点は「分かってすっきりした」という快感にあります。「家で教科書を読んだだけではよく分からなかったけれど、授業を受けたら分かった。これは予習のおかげだ」と実感できる機会をつくることが大切です。

同校では、「分かる授業」とは何か、実現する方法は何かを、校長先生自身が真剣に考え、分かる授業が成立するために家庭学習も視野に入れた経営をされている点に共感を覚えます。また、そのために、自らも頻繁に授業を観察したり、小学校や研究者など外部の視点を積極的に取り入れたりして、管理職の役割の一部である「率先垂範」「インプットする場の提供」を意欲的に実践されている点も、校長経験者から見て強く印象に残ります。

◎取り組みを深める視点
固定概念にとらわれずに工夫を

生徒がスムーズに学びに向かう家庭学習の工夫を2点、提案したいと思います。

①定期テストの範囲を「積分方式」に

私が中学校長を務めていた時、定期テストの出題範囲はそれ以前の範囲も含めてはどうかと考えました。高校入試では中学3年間の学習内容すべてが出題範囲だからです。大学入試や社会人になっても、同様の場面があります。私たち教師は、短期記憶ばかり重視する指導で学びを育ててはいけないと思います。

②方眼ノートを使う

例えば、数学では定規を使わずフリーハンドでさっと図形を書けるようにしたいものですが、特に学力中・下位層の生徒は苦手なようです。方眼ノートを使えばこれが容易になります。合同や相似の概念も視覚的に理解しやすくなり、筆算もずれずに書くことが出来ます。教師も生徒も保護者も「中学生になったら大学ノート」という固定概念やプライドがあるかもしれませんが、学力保障のために本当に必要なことは何か、という視点で家庭学習指導を考え直したいものです。

かぶらぎ・よしお　日本電信電話公社電気通信研究所に勤務、病気療養後、教員免許を取得。教育委員会、公立小・中学校校長を経て、現在、全国の学校の授業改善を支援する。主著に『教えて考えさせる授業』（図書文化社・共著）他。